

悠久の京を訪ねて PartⅢ Vol.6



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。
京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。
私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

縄文時代の暮らし — 府内では珍しい石囲炉 —

伊賀寺遺跡



■ 4,000年前の炉跡



府内最大級の石囲炉と炉から出土した深鉢形の縄文土器

長岡京市の南西を流れる小泉川の流域では、近年の発掘調査で縄文時代の集落が相次いで見つかっています。伊賀寺遺跡では、縄文時代中期末（4,000年前）の竪穴建物の中に造られた石囲炉が見つかりました。

そもそも近畿地方で見つかること自体珍しい石囲炉ですが、今回発見されたものは一辺1mを測る立派なものでした。石囲炉の石材には川原石が使われていました。石の表面は、高い熱を受けて細かなひび割れが生じていました。また、炉の内部はすみずみまで真っ赤に焼けており、炉の南側には真っ赤に焼けた土がかき出されていました。かなり強く火を受けたことがわかります。炉の中からは煮炊きに使ったと考えられる深鉢形の縄文土器が出土しています。

■ 炉跡からわかる東日本との交流

縄文時代の炉には、土を掘りくぼめて火を焚いた炉と周囲に石をめぐらせた石囲炉があります。西日本では前者が一般的でした。伊賀寺遺跡で見つかった石囲炉は、中部・関東など東日本からの影響を強く受けた炉と考えられています。近畿地方の集落では、住居の中で調理・採光・暖房の役割を果たす炉は、それまで囲いなどのないシンプルなものでしたが、中期末になると、東日本からの影響により石を用いた石囲炉が一部で造られるようになります。炉以外にも、土器の形や文様の変化、打製石斧の出土量の増加、集落の数が増えるなど、生活様式そのものに大きな変化があったと考えられています。

伊賀寺遺跡で見つかった集落跡はまさにこの時期のもので、東日本との交流を大きく反映しているものと思われます。

縄文時代の人やモノの流れは、現代のわれわれが想像する以上に広範囲に展開していたことを示す資料といえます。



石囲炉のイメージ
(提供：公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター)